

---

# 変人たちのいるところ

りん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変人たちのいるところ

### 【Nコード】

N8422Q

### 【作者名】

りん

### 【あらすじ】

とある普通(?)男子 小田桐 圭一 が高校に入って聞かない部活に入部

そこにはちよつと変わった人たちがいた

青春指導学部とは一体!?!?

学園青春ドタバタコメディー

四月二日

高校生になりました

一般入試見事合格

公立高校青雲寺第一高等学校

今日から俺の素敵なスクールライフが始まります

友情 恋 大人への仲間入り

青春は俺を甘い声で呼んでいます

待ってて、今すぐそっちへ行くよ

ここから俺の人生一度きりのワンダフルタイム

…のはずだった

俺は青春指導学部の部室にいました…

○

三日前 四月二日

入学式を昨日終え今日から本格的な高校生活が始まる

青雲寺第一高等学校

青雲高校と地元で愛着を持って呼ばれている

偏差値52の中の上といったところだ

敷地はやや広く三階建て

少し離れたところには体育館と野球部専用の寮がある

グラウンドもなかなか広い

公立高校とは少しかけ離れた設備により毎年受験生が多い

多数の受験生のなかから受験競争にかちぬいたのだ

俺の学力はご説明しよう

この高校を選んだ理由は設備がいいなどではなく、ただ第一志望だった高校に受かるのは嬉しいからだっ

先生に「お前が受かる確率はヤムチャが悟空に勝つ確率だ」とはっきり言われてしまった

当然ヤムチャが悟空に勝つなんてのは到底無理な話だ

しかし悟空が心臓の病に倒れるかもしれない、受験なんてのは何が起るかわからない、ということが言いたかったらしい  
さすがに悟空が心臓病にかかる確率には賭けるなんてことはしたくない

だからひとつレベルを下げてこの青雲高校を選んだ

お分かりいただけたかな

俺は多数の生徒が校内へと入り込む校門を抜け東玄関に到着した

靴置場に向かい靴を履きかえようとしたとき後ろから「おっはよ」と女の子の声が聞こえた

振り返ると女の子は…

隣の女子生徒に抱き着いた

…俺じゃなかったみたいです

女子の友達なんかいるはずなのにちょっと期待してしまった

いいじゃないか、高校生だもの

登校初日いきなり女子とのイベントを期待したっていいじゃないか  
思春期だもの

そこにいるとなぜか悲愴感しかなかったので俺は足早に自分の

教室へと向かった

教室はここからまっすぐ行って右に三つめの教室  
扉の右上には1-Cと標記があったので間違いはないだろう  
少し身だしなみを整えた

緊張 不安 期待を抑え込んでいつもどおりを装いスライド式のド  
アを開けた

教室にはざっと40人分くらいの机があった

生徒はほとんど登校して知ってる顔もいくつかある

俺は自分の席についた

名前順になっているようで俺の席は3列目の一番後ろだった

しばらくすると担任の先生が入ってきた

記憶に新しい顔

確か入学式の時にも挨拶してたっけ

身長は高く長い髪はぼさぼさになっている

さらにスーツをだらしなく着こなしたそのなりはどこか不清潔感を  
印象付けられた

確か名前は……

あゝここまで出かかっているのに

テレビを見ていてタレントの名前が思い出せないのと同じ感覚  
教えてくれっ 先生の名前は!?

「このクラスの担当になった近藤だ、よろしく」

…大してスキツリしなかった

近藤先生はとてもだるそうにHRの開始を告げた

「んじゃまずはテキストに自己紹介でもしてくれ、安藤からな」

一番最初はきつきな

俺は安藤君に同情と憐れみを感じながら自己紹介の内容を考え始めた  
出席番号順だと俺まで回ってくるのには少し時間があるのでなんと  
かいけそつだ

自己紹介はその人の第一印象を決める大事なものだ

俺のこの誠実さとフレッシュさをどう表現したらいいものか  
やはりここはマニュアルど通りにいこうかな

うん、そうしよう

こんなことでボケをかましてすべったりでもしたら俺はもう高校な  
んていけやしない

そうこうしていると俺の前の武田というやつが自己紹介が終了した  
なぜか武田君は肩を落として沈んでいる

プレッシャーに押しつぶされたように

疑問に思ったが今はそんなことを気にしている場合ではない

深呼吸をして立ち上がる

内容は大丈夫 普通に 普通に

その時一気に視線が向けられる

ゾクッ

体全体に鳥肌が立つ

いやな寒気を感じる

まさかこいつら…飽きてやがる…!

みんなまじめに言うもんだから飽きっちゃてるんだ

まだ先は長いのに

期待するなら後半にしるよ!

！！

そうか、武田君はこのプレッシャーに負けたんだな  
おもしろいことが浮かばなかったんだ

ああ、俺だつてそうさ

何も浮かばねえよ！！

でもここで引き下がるのは何か嫌だ

男じゃないよな

なあ、武田さん！？

俺はもう一度、さっきよりも深い深呼吸をして決意した  
ダンコたる決意だ

そんな俺の様子を感じたのかさっきまでヤバい目をしていた奴らが  
ニヤニヤしている

これで逃げられなくなった

もうやけくそだ！！

バスケの全国大会でするような決意をさらに固め後 残ったのは後  
悔だけだった

○

HR後の休み時間

俺は机に突っ伏したまま動けずにいた  
動きたくなかった

五感を研ぎ澄ませばはつきり感じる

クスクスと笑う奴

俺をキモ男などと罵倒する奴

何より全員が俺をゴミを見るような目で見ているのが分かった  
いや、もしかしたらゴミのほづが愛されているかもしれない

なんであんなこと言っちゃまったんだ、俺は

ただみんなを楽しませようとしただけなのに  
思い出しただけで吐き気がする

いや、ちゃんと向き合っただ現実と

今後のために後悔ではなく反省を

自己紹介一部始終

決意を固めた俺は膝が爆笑しているのを気合で抑え込んで自己紹介  
を開始した

「千登勢<sup>ちとせ</sup> 圭一です。好きなものはヒ・ミ・ツ？ 圭ちゃんって呼  
んでね？」

… 静寂

近藤先生が俺に気を使って

「お、おう 圭ちゃんな アハハハハハ」

なんて言いやがる

柄じゃないのに

余計にそれが俺を更なる絶望へと追い込んだ

反省終了

うん、やっぱただの後悔だ



○

その一日はホントに最悪だった  
クラスの女子に睨まれるわ  
誰もしゃべりかけてくれないわ  
知り合いまでもが俺を他人だと言い張る始末  
完全にクラスで浮いた存在となった

フツ終わったな、俺の高校生活  
さらば青春

もうほとんど青春をあきらめた俺の目の前に一人の女の子が立っていた

次は何をされるのかと怯えながら顔を上げて見ると  
幼げな容姿にそれに似合った顔  
確かこの子は

「霧崎…あおいさん？」  
そうだこの人は霧崎あおいきりさき  
自己紹介がおもしろくない内容だった人だ

まあ、避けられるような内容よりかは断然いいけど…

名前を疑問形で言うと少女は  
「え！？覚えててくれたの！？うれしいなあ〜」  
そういつて無邪気な笑顔を僕に向けてくれる  
「何か用？僕みたいなキモ男に」  
いろいろながあつたせいしかもものすごくネガティブなったらしい  
しかし霧崎さんは

「千登勢君はキモくなんかないよ。そりゃいきなりあんなこと言い出すからびっくりしたけど  
私にはわかるよ、いい人だよ」

泣きそうになった

まさか女の子に優しくされるなんて

もう諦めてたのに

「えっと、用は別にないんだけど…ちょっと気になっちゃって」  
「え？」

「それじゃ、また」

そういつてトタトタと少し駆け足で自分の席に座った

おいおいおいおい

何だ何だナンナンダあの子は  
気になったあ？くっくくく

笑いを必死でこらえる俺を見て明らかかな嫌悪感をかもしだしながら  
気味悪そうにしている

が、しかしそんなことは関係ない  
笑わずにはいられないのだ

あの子もしかして

僕のこと好きなのかあ！？

ドキドキが止まりませんでした

○

帰りのHR

夕日が西側の窓から射してくる

下校している生徒や部活に勤しむ生徒がちらほら見られる

俺も早く帰りたいなあ

外の様子を机に肘をつけて横目で見てみると近藤先生がやる気の感じられない声で言った

「えーまあ、部活の話なんだがな。明日から仮入部期間に入る。入部したい部活があったら今から2週間以内にこの紙に部活名と必要事項を書いて俺に渡してくれ」

そう言いながら入部届を配り始める

部活かあ

中学の時は部活には入っていなかった

運動神経は多分いい方だけだただだめんどくさかった

高校も部活には入る気はなかった

青春の醍醐味とは言ったもののやはりきついことはしたくない

ま、俺には関係ないか

近藤先生がHRの終了を告げる

「今日始めてなこともあって色々大変だっただろうが、まあ、慣れてくさ。以上HR終わり」

色々という言葉に少しひっかかった

そろそろと生徒たちが教室を出ていく

俺も帰ろうかと思って席を立とうとしたとき、ふいに呼び止められた

「千登勢君、一緒に帰らない？」

言っている意味が最初分からなかった

女の子と一緒に帰ろうと言われたのは初めてだったので…

ありがとう、神様。私にチャンスをくださったのですね

まるで恋する乙女のように本気でそう思った

俺はさっきまでのネガティブを完全に押し殺した

「ええ、もちろん」

高校一年生思春期でした

帰り道

太陽が真つ赤に染まり俺たち二人を照らしている

住宅街を歩きながら二人はたわいもない会話をしていた

そう、二人

男子諸君なら一度は憧れるイベント

女子と一緒に下校

しかも相手はとびきり可愛いのだ

「千登勢君は部活どこに入るの？」

「いや、部活には入らないつもりなんだけど、霧崎さんは？」

会話を終わらせたくなかったので逆に質問した

霧崎さんはんーと唸ると俺の前に出てきて優しい笑顔で

「決まってるけど圭一君には内緒だよ。じゃ、また明日ね」

そう言っただけで走りながら手を振って去っていく

霧崎さんが圭一君と言ったことも頬を赤らめていたことも夢のよう  
に感じられた

夕日のせいじゃないよな…

夢というのはすごく儂いものなのです

○

○

帰りにコンビニで週刊少年誌とコーヒーを買って帰った  
新連載開始のマンガが表紙を飾っている

家に帰ったらじっくり読もう

もう辺りは日も沈み真っ暗だった

ダッシュで帰った

今まで見たホラーなものが鮮明によみがえってくる

涙がこぼれそうになったけど目の前が見えなくなるのはさすがに…

家に到着した

もう7時だ

今日は疲れたもう寝よう

買った雑誌とコーヒーをリビングに置いて二階に上がった

制服を脱ぎジャージに着替えそのまま目を閉じる

今日やってしまったことをもう一度後悔しそしてまた出会った少女  
のことを思い出した

はっ！！

これが恋！？

その夜はなかなか寝付けませんでした

## 四月三日

四月三日早朝

目覚まし時計が七時を指して大きな音を部屋中に響き渡らせる  
目覚ましをセットしたものの実際昨日は眠れなかった

昨日の少女のことを考えると胸が痛い

うん、もうこれあの子のこと好きなんです。僕

それが一晩考えた結論でした

まあ、とりあえず起きようか

頭痛がひどいけど頭痛なんかで学校は休めない

しかもあんなことをやっちゃまった後で学校を休むと完全に不登校コ  
ースだ

俺は風呂 着替え 朝食 歯磨き ヘアチェックをスムーズに済ま  
せ玄関を出た

登校中机に「キモ男死ぬ！」などの陰湿な落書きがされていない  
だろうか心配になり少し足早になり学校に向かった

教室に入ったとき一瞬冷たくい視線を感じた

心配が膨らみ確認を急いだ

書かれてなかった

もし書かれていたなら泣きながら消しゴムゴシゴシだったよ  
消しゴム真っ白になるとこだったよ

安堵した俺の目の前に夢の少女が現れた

おはよつと俺に笑顔を向けてくれた

ヤバイ、可愛すぎる

俺はその笑顔に見とれ、ろくな挨拶もできなかった

「う、うん」

自分でも情けない

女の子の前では普段いいかつこしちゃうのだがこの子はどうも…

「今日も一緒に帰ろうよ」

今来たばかりなのにもう帰りの話

そんなに俺と帰りたいのかな

男子が女子に気になるなどと言われて色んな妄想をしてしまうのは致し方ない

これはもう決定的ではないのか！

おれは幸せになっていいんだよな！！

頑張つて表情を変えずクールで言う

「うん、いいよ」

これが精一杯だった

すると少女　霧崎あおいは笑みを崩さないまま

やった、と小さく弾むように言うと言とスキップで去って行ってしまった  
呼び止めようとしたがもうすぐHRが始まるどころだったので諦めた  
HRまで帰り二人で何を話そうかと考えたが今は思いつかなかった  
のでネタをそれまでに探そうと決めた

チャイムが鳴りそれとほぼ同時に近藤先生が教室に入ってくる  
見た目とは意外に時間厳守の性格らしい

しかし先生はだるそうにHRの開始を告げる

「おはよう諸君、HR始めますよ」

目が死んどる！！

そう思ったが昨日のこともあっておそらく俺は目をつけられている  
だからこれ以上目立つわけにはいかないので何も言えなかった

先生は昨日食べ損ねたサバのような目をしながら

「その前に昨日言い忘れてただけだな、部活のことだな」

部活の話か…

俺には関係なさそうだなー

そう思ったがその内容は少し奇妙だったため自然と耳を傾ける

「この学校には近づいちゃならん部活があるんだ、青春を楽しみたいなら近づくんじゃないぞー」

先生はそれだけ言うとお席を取り始めた

それが教師のいうセリフ？

疑問だったが部活に入る気のない自分にとってはやはり関係ない  
そのままHRが終わるまでぼーっと過ごした

HR終了後

一限目まで読書でもしようかと思ひ、鞆から半分くらいの所にしおりを挟んである本を取り出した

その時近くで男子の集団ができ、何か話をしている

彼らの声は十分聞こえた



「昨日のジャンポ見た？」

「ああ、見た見た。すごかったな、今週のにやると」

話はどうやら昨日俺が買った週刊誌のこのようだ

男子達は当然のようにいくつものマンガのオチを語りだす

ここにいたら読む楽しみがなくなってしまふ

最後が分かっているものを誰が心から楽しめようか

そんなのは7歳までだ

地球を救う異星人の特撮でも見ている

俺は持ち出した本を机にしまい、急いでその場を離れた

しかしなぜだか涙があふれてくる

心はブルーだ

…そうか、ハヤシ先生死んだのか…

気持ちを切り替えるのに少し時間がかかった

四月三日？

席を離れてみたものの行く当てがない  
辺りを見渡していると先ほどの少女　霧崎あおいが一人でいるの  
が目に入った

少女は本を読んでいる

先ほど俺が読もうとした本と同じくらいの厚さだ

窓から朝日が差し込み少女を照らしているのだが、その光が彼女を  
さらに可憐に見せた

しばらく観察していると少女はピーターラビットのしおりを挟み本  
を机にしまいこんだ

俺はふいにチャンスだと思い、考えるより先に体が動いた

「霧崎さん、何読んでたの？」

愛想よく後ろから声をかけた

霧崎さんは振り返る

が、その顔はものすごく緩まっている

ニコニコというよりニヤニヤ

「あ、圭一君」

どうやら圭一君で確定のようだ

「この本？これね、恋愛小説なの」

恋愛小説か

なるほど、女子はこの手の小説を読むとこのような顔になってしま  
うのだな

一人で納得する

「ふ〜ん、面白い？」

一応聞いてみる

すると少女は、うん！と元気よく頷く

恋愛小説など読んだことないけど興味がないわけではない

質問攻めしているみたいで気が引けたが聞いてみた

「何て名前なの？その本」

「シンデレラ」

即答だった…

そしてたくさんの疑問符が頭の中に浮かぶ

「それって…いじめられてた少女がある日舞踏会に行くために魔法でおめかしして、王子様が一目ぼれして、彼女のガラスの靴を捨てて、それに合う少女を探し出して、結婚するあれ!？」

長々と言ったがこれが要約できる精一杯だった

霧崎さんは目を丸くして驚いている  
まずい、勢いよく言いすぎて引かれたか？

「シンデレラ、読んだことあるの!？」

そっち!？

童話だよそれ!？ 恋愛小説チガウ!!  
!？  
そもそも何その本の厚さ

霧崎さんは

「なんで落ち言っちゃうの!」

「ご、ごめんなさい」

怒られるとは思わなかった

しかし俺はさっきの男子と同じことをしてしまったんだなあ

彼女の勢いに色んな疑問が消されてしまった

「気を付けてね、そういう人あんまり好かれないうよ」  
「どうやらもう怒ってないみたいだ」  
俺は適当に頷き話題を無理やり変えた

「さつき先生が言っただけど、近づいちゃいけない部活ってなんだろうね？」

すると霧崎さんは急に苦い顔をして言う  
「さ、さあ、なんだろうね」

声が軽く裏返っている  
明らかに何か知っているが、しつこい男はアレなのでもう聞こうとはしなかった

○

昼休み

俺は昼食をとろうと弁当を机の上に置いた  
どうせなら霧崎さんと一緒に食べよう  
そう思い彼女の席を見たがそこに霧崎さんはいなかった  
仕方なく一人で昼食にすることに  
する  
弁当のふたを開ける

そこには…昨日食べ損なつたサバが入っていた

俺の弁当を詳しく説明すると  
弁当いっぱい敷き詰められた米の上に半身のサバ  
以上!!!

そーいえば昨日何も言わずにそのまま寝ちゃったからな  
嫌がらせだろっな…

しかし売店で買うお金もないし、なによりもつたいない  
俺は弁当の箱を持ちガツガツと口の中にかきこむ  
サバを落とさないようにして時々サバの身をとり、一緒に食べる

霧崎さんがいなくてよかった  
こんな情けない姿を見せたくなかったので

だけど霧崎さんどこ行ったんだろっ？  
食堂かな

○

とある部屋

校内にあるとは思えない内装

部屋の大きさは5LDK

中央にはテーブルを挟み両サイドに黒のソファが置かれている

そして奥に60インチほどのテレビ

辺りにはロッカーやぎっしり本が詰まった本棚

更には冷蔵庫までもがある

壁は真っ白

床はフローリングになっており絨毯がひかれている

その部屋の入り口の扉には「青春指導学部」と彫られた木札がつる  
されていた

今は昼休みなので電気をつけなくても十分明るい  
部屋の中には二人  
互いに向き合うようにソファに座っている

その一人 幼い容姿をしたショートヘアーの少女が先に喋る

「今日も帰る約束したよ」

すると向かいの 髪は赤茶色で短髪 好青年という言葉が似合う男  
が応える

「そうか…しかし事情が変わった。今日の放課後はこの部屋に連れて  
きなさい」

「え？でもみんないるんじゃない？」

「ああ、だからこそだ。彼の反応が見ておきたい」

「そう、わっかた、お兄ちゃん」

「ああ、頼むぞあおい…」

そして二人はそれぞれの、内容の同じ弁当を食べ始める

「「あつ肉団子！」」

四月三日 ？

帰りのHRが終わり帰ろうとした時、ふと思い出す  
そーいえば、霧崎さんと一緒に帰る約束してたなー  
そして気づいた

話すネタが見つかっていなかったことに

自分の中で試行錯誤していると、目の前に一人の少女が立ちふさが  
った

「あ、ああ、霧崎さん」

彼女に動揺を悟られないようにする

彼女は笑顔だった

「えっと、もう帰る？」

すると彼女は、「うんう」と首を横に振る

自分から誘っておいて…？

思ったが彼女の話の話を続けて聞く

「実はね、部活動見学一緒にきてきてほしいの」

「部活動見学？」

部活に入る気のない自分には関係ないのだ  
が、しかし

霧崎さんが言うのだ、行かないわけがない

俺は自分でも聞いたことのない、いい声で言う

「うん、行こうか」

すると霧崎さんは、ぱああと笑顔になり

「ありがとう！」

そう言ってくれる

俺はこれが聞きたかったのだ

○





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8422q/>

---

変人たちのいるところ

2011年10月8日14時07分発行